

海外研修報告書(2024年度：2023年9月1日～2024年8月31日)

生活環境学科 准教授 鎌田誠史

## 研修の概要

研究調査の期間

2023年9月1日～2024年8月31日 (1年間)

研修期間と身分

National Technical University of Athens School of Architecture (アテネ国立工科大学建築学部) 客員研究員

研究調査の概要

「エーゲ海・キクラデス諸島の歴史的な集住環境の空間構成と地域固有のエコロジカルな環境構築技術についての研究」をテーマに、キクラデス諸島の島嶼集落の調査を実施した。これは、ギリシャ・エーゲ海に浮かぶ伝統的な島嶼集落の空間構成と地域固有のエコロジカルな環境観を歴史的生活空間が持つ特徴的な空間形成技術として捉え、持続可能な集住環境の構成原理と固有価値の多角的な評価モデルの作成を通じて、それらを可視的に検討することを目的としている。これらの成果を手掛かりに、今まで行ってき南西諸島を含むモンsoonアジアの島嶼集落研究と比較することで、自然環境に対応した生活空間の持続可能性や、島嶼型減災に備える「リスクリダクション」、歴史的景観に配慮した景観形成への方途を検討するものである。加えて研究を推進するための国際的な共同研究体制の構築を図りたいというのが研修の主なテーマであった。

### 1. アテネ国立工科大学建築学部での研修

派遣先のアテネ国立工科大学 (NTUA) は、アテネ市内の中心部に位置するSchool of Architectureキャンパスと、アテネ中心部から少し外れた場所に位置するPolytechnic Campusの2つのキャンパスを持つ、ギリシャで最も古い公立大学とされる。私が派遣されたSchool of Architectureキャンパスは、2013年にヨーロッパノストラ遺産賞を受賞した古い立派な建築を保存改修して若い建築家の学び舎として活用されている。ちょうど武庫川女子大学の甲子園キャンパスの活用と重なるものであり、重厚な雰囲気ではあるが大変親しみやすい建築であった。私が滞在した2023年現在、学部生は約1,500名、大学院生が約200名、博士課程が約150名の大きな学部となっている。学舎の隣には国立考古学博物館があり、歴史的でアカデミックな雰囲気のある素晴らしい環境であった。このような教育環境のもとで、主に



学舎の様子 (撮影：鎌田誠史)

建築の講義とスタジオでの建築設計演習が行われており、教員を囲んでエスキース・チェックをする光景は日本の建築教育と大きく変わるところはなく、学生たちが各々図面を描いたり、教員に指導を受けていたり、数名でおしゃべりしていたりしていた。しかし、ひとつ違う点として、学生はスタジオの中に閉じこもってエスキ



創作活動に励む学生の様子（撮影：鎌田誠史）

スをするのはあまり好まず、学生各々が自分の机を中庭に出して降り注ぐ太陽の下で創作活動に励んでいた。これはギリシャやその他ヨーロッパの人たちがオープンカフェでくつろぐ姿に重なって大変興味深い光景であった。

私を担当してくださったNicholas先生は、当大学建築学部の専任の准教授として教鞭を振るわれており、専門は建築計画をベースにパーマカルチャーや持続可能な都市や地域の計画論などその幅は広く、近年はヨーロッパの大学と共同で持続可能な環境についての国際プロジェクトを運営している。加えて、様々な専門家によって組織された「持続可能なキクラデス諸島のためのネットワーク」に参画して持続可能な島嶼の景観や暮らしについての提言を行っており、その内容は私の研究テーマと深く関わるものであった。Nicholas先生にお誘いいただいて私も持続可能なキクラデス諸島のためのネットワーク」のメンバーに加えていただいた。また、Nicholas先生にはプライベートでは大変お世話になり、建築家の友人とともにアテネのワインバーやカフェで素敵な時間を共にさせていただいたのは一生の思い出である。

このようにして、アテネ国立工科大学での研修を行いながら、キクラデス諸島のある小さな島での調査生活に期待を膨らませていた。

## 2. エーゲ海・キクラデス諸島の概要

### 2-1 ギリシャについて

具体的な調査生活に触れる前にギリシャという国について簡単に触れておきたい。ギリシャの人口は、2023年の時点でおおよそ約1,046万人（日本の約10分の1）、面積は131,957平方キロメートル（日本の約3分の1）の小さな国である。在留邦人も638人（2022年10月現在）と少ない。今回の報告で歴史に触れると紙面が足りないのので、地理を大づかみに区分しておく、ギリシャ本土とエーゲ海の島々、そしてイオニア海の島々の大きく三つに分けられる。その中でも今回の研究の舞台であるエーゲ海には、人が暮らす50の島々があり、美しい海と白い家々、燦燦と降る注ぐ太陽を求めて世界中から観光客が来島している。5000年も前から偉大なエーゲ文明を生み育んだ地域であるが、しかしエーゲ海は見通しの良い穏やかな海で、船で漕ぎ渡ることが容易であることから、島々は異なる民俗の侵略にさらされ

てきたとされる。エーゲ海諸島がギリシャに加えられたのは、実は19世紀になってからにすぎない。私はこのエーゲ海のなかでもキクラデス諸島という美しい島々に魅せられ、この範囲を研究対象とすることに決めた。

## 2-2 エーゲ海・キクラデス諸島について

キクラデス (Cyclades) は、透き通るエーゲ海の中央に浮かぶ20余の有人島を含め約210の島からなる島嶼郡で、「キクラデス」はギリシャ語で「円環 (輪)」を意味する。ハイシーズンは世界中から訪れる旅行者であふれかえり、ローシーズンはどの島も閑散としている。季節風のおかげで夏は涼しく、冬は暖かいとされているが、近年の温暖化で状況は少し変わってきているようである。私が滞在した2023年から2024年にかけて夏は猛烈に暑く、冬は極めて厳しい暴風に見舞われた。しかし、ぬけるような青空に恵まれた日は心の底から湧き出る高揚感に浸れる素晴らしい場所である。

キクラデス諸島の先行研究によると、「キクラデス諸島はひとつの文化圏として固有性とまとまりを示しており、それを島単位の部分に切り離すことも、あるいはより大きな領域の部分として統合させることも適当ではない。構築物のかたちや集落形態はもちろんのこと、自然地理的にも、また歴史過程を通じた文化的環境としてもキクラデス文化形態なるものへの

収斂と各島の固有性とを考えると考えることができるからである。」と述べられており、同じくひとつの文化圏として南西諸島の集落郡を研究してきた身として非常に興味深い見解であった。また、キクラデス諸島の有人島は20島でかつ比較的コンパクトな範囲に収まっていることもあり、私はこのエーゲ海に浮かぶ円環 (キクラデス) を研究調査範囲として設定した。

## 3. パロス島での暮らし

### 3-1 パロス島について



ギリシャ全土とキクラデス諸島の地図  
(出典: <https://ja.wikipedia.org/wiki/>に一部加筆)



キクラデス諸島の地図  
(出典: <https://ja.wikipedia.org/wiki/>に一部加筆)

滞在調査の拠点となったパロス島は、キクラデス諸島で3番目に大きな島で、総面積は196.308 km<sup>2</sup>、現在の人口は14,520人で、日本の島に例えると面積は小豆島より少し大きく、人口は小豆島の約半分と大変のどかな島である。しかし、パロス島はエーゲ海で最もアクセスしやすい島のひとつであり、港や空港があるため、経済は観光業に基づいている。かつては第一産業が島の基幹産業となっていたが現在は耕作放棄地が多く、そこにセカンドハウスなどの宅地化が進んでいる印象である。島には公式の集落境界を持つ24の集落があり、そのうち10集落は伝統的集落に指定されている。

島は大理石と片岩からなる北東から南西に向けた中央山脈（標高770 m）が地形を特徴づけている。島の南西部と東部では、急斜面が海岸に達し、孤立した平野を形成している。北西部の高地平野に隣接する急峻な海岸を除けば、ほとんどの海岸地域は砂浜と平野で構成されている。平野部では、沖積土と粘土質の土壤が島で最も肥沃な地域を形成しており、ほとんどの集落がここに立地している。

島の主要な公共交通機関はバスで、鉄道はない。バスの本数は少なく、多くの島民が車やオートバイを所有している。パリキアと呼ばれる中心部の街では生活用品などを容易に入手できるが、山間地域の集落では入手に苦勞する。まちや集落の中心には必ず教会とカフェがあり、住民のコミュニティの中心となっている。このカフェではバスの時刻を知ったり、ちょっとした日用品を購入したりできる。

### 3-2 コストス (KOSUTOS) 村での暮らし

私が暮らしたのは人口約200人（2001年の国勢調査では235）で住居が100棟もないコストス (KOSTOS) と呼ばれる小さな村である。ここは宿を貸してくれたギリシャ人のオーナーの生まれ育った地であり、パロス島の伝統的な10集落のひとつに数えられる。中山間部に位置しており、周りはオリーブ畑と牧草地に囲まれたのどかで美しい村であった。残念な



パロス島の地図

(出典: <https://www.thehotel.gr/info/en/Paros> に一部加筆)



パロス島の夕景 (撮影: 鎌田誠史)

がらこの村からは透き通ったエーゲ海は遠く、エーゲ海のリゾート暮らしというわけにはいかなかったが、紆余曲折ありながらもこの小さな美しい村での暮らしを始められることに安堵した。

私が晴れて村民となり、初めて迎えてくれたのはたくさんのシマ猫であった。ギリシャの猫は体が小さく足が短いのが特徴で、とにかく愛らしくまた人懐っこい。コストス村のシマ猫たちも例にもれず、というか



コストスの遠景（撮影：鎌田誠史）

今まで経験したことのないほどのなつきようであった。ここでシマ猫たちと称したのは、飼い猫の概念が日本とは少し違って、猫たちは村全体で飼われている地域猫のようであった。ほとんどの猫は去勢手術済みであり、そのしるしとして片方の耳に小さくカットされている。首輪をしている猫もいるがしていない猫もいて、村のいたるところ餌場が点在していて、猫たちはそれぞれの縄張りのなかで共存していた。私はその猫コミュニティのひとつに入れたようである。さらにその中の一匹にたいへん気に入られて、初日から彼女（メス）との共同生活がスタートした。

私は生活になじむために村の中心にある教会でミサに参加することから始めた。オーナーのお母さまが熱心なギリシャ正教徒だということで一緒にミサに参加することができた。ギリシャではほぼすべての国民がギリシャ正教を信じ、大きな都市から小さな村に至るまで空間的にも宗教的にもギリシャ正教会が暮らしの中心に存在している。コストス村でも毎週日曜日のミサが行われ、司教は数か所の村を管轄しているとのことであった。村民の多くがミサに参加していたが、その年齢構成は高齢者とその孫と思われる小さな子供が多かった。聞けばギリシャでは若年層の宗教離れが著しいとのことであった。この小さな村ではもちろん日本人はおろかアジア人の参加は私ひとりであったが、村人たちは特に気にする様子はなかった。それどころか積極的に「ヤーサス！（ギリシャ語で「こんにちは」）」と声をかけてくれる方が多かった。ミサが終わると村に2つあるカフェのひとつでお茶とお菓子がふるまわれて、参加者はおしゃべりに花を咲かしていた。

キクラデスは父系血縁の同族社会とされる。それは「クラン」と呼ばれ、血を分けた小集団の絆が何よりも大切で、ファミリーのアイデンティティを図るために同族だけの礼拝堂も築くほどである。つまり、村の中心にある教会では村全体のコミュニティが醸成され、各家族の礼拝堂ではクランとしてのコミュニティが維持されるといった具合でこの2重構造は大変興味深い。

村の暮らしは極めてプリミティブでシンプルであった。日が昇るとともに鳥がさえずりだし、夕方になると放牧から帰ってくるヤギの鈴の音が心地よく響き、夜になると満天の星空の下で猫たちと星を見上げながら静かな夜を過ごした。

ところで小さな村には商店はない。かわりに移動販売の車が毎日来て村人たちの生活を支えている。このような村での暮らしに幸せを感じながら少し生活にも慣れたところでいよいよ島の集落調査をスタートさせることとなった。

### 3-3 パロス島の集落

#### (1) コストス

私が暮らしたパロス島の中山間部にある小さな集落。白い石灰で塗り固められた住居が密集する集村で、ドロモッシュと呼ばれる細い路地が入り組んだまるで迷路のような街区構成をとっている。なぜにここまで密集するのか。ドロモッシュも分厚い住居の壁も材料が石のみで単一的である。集落を構成するほとんどが石を積んだ空間が占め、この重厚でシームレスな集落は、透き通る空の青と光と影のコントラストに映えて美しい風景を作り出している。居住域の中心にはギリシャ正教会と広場、そして2軒のカフェがあり、村人のコミュニティの中心となっている。居住域には100軒ほどの住居がありその周りをオリーブ畑や牧草地の生産域が取り囲んでいる。居住域は背後の山の尾根上の安定した場所に形成されている。居住域と生産域の境界あたりに共同井戸があり、昔はこの井戸から水を得ていたとのことである。

#### (2) レフケス

コストスから約5kmのところレフケスという美しい村がある。このレフケスという村は標高約200mの人口約600名の小さな村である。内陸に位置する山間の集落としてはパロス島で最大で、最も標高の高い場所にある。かつては海賊などの侵攻から逃れるためにパロス島に限らず集落は山間部に形成されたようである。レフケスは19世紀末までパロス島の中心的な位置づけであったとされている。先行研究によるとこの村は斜面にへばりつくように立地しているとされているが、実際に訪れてみると、居住域は背後の丘陵の尾根から降りる先端(フィンガートップ)の最も安定している場所に、立派で



レフケスに咲き誇るブーゲンビリア (撮影：鎌田誠史)

美しいギリシャ正教会が鎮座し、その背後に居住域が形成されている。そして人口が増えるにつれてさらにその背後の斜面に居住域が広がった結果、現在の斜面型集落のような形態になったと想定された。

村の居住域の路地は極めて狭く入り組んでおり、随所に美しい景観を楽しむことができ、散策するだけでも多くの発見があった。ブーゲンビリアが咲き誇る、まるで絵のように美しい集落である。

1970年代以降、多くの住民がアテネに移住したようであるが、ここ数年、観光業が地元住民の新たな収入源となり、家屋の再建や景観整備が行われ、観光地としての魅力が高まってきている。

#### 4. 研修の成果と今後の展望

今回の報告では主にアテネ工科大学での研修とエーゲ海・キクラデス諸島での暮らしと調査を中心に述べたが、次の研究テーマを発見することができたことも研修の大きな成果であった。以下、そのテーマの概要と今後の展望を述べて本報告のまとめとしたい。

パロス島に限らず、キクラデス諸島の島々に降り立ってまず驚いたのは教会の多さであった。集落の中心部にはギリシャ正教の立派な教会が鎮座して、加えて集落には住民が建設した一族の小さな教会が点在している。この教会は個人所有のものもあれば共同で所有しているものもあるようで、例えばかつてサントリーニ島の教会は住居の数より多いとされていたほどである。驚くべきは集落と教会の位置関係で、1～3kmの範囲に多くの教会が点在しており、それが村の範囲を規定している可能性を示唆していた。さらにその周辺を丘陵で囲まれた集落が多く、その山頂にもまた教会が配置されていることがわかった。これは私が研究している南西諸島の村の領域の考え方と極めて類似しており、島嶼集落における領域性に着目しながら調査を進めていくと、南西諸島とキクラデス諸島の多くの共通点が発見することができた。

また、今回の調査から南西諸島とキクラデス諸島の集落はともに生存の根幹にかかわる領域を求め、各島の地形的特徴によって規定される環境条件を読み取りながら、自らが生存する生活空間としての「生存領域」を形成するという独自の生存文化を形成してきた可能性を指摘することができた。このような「生存領域」の形式において、島嶼の厳しい生存環境の中で、先人たちがその環境に依存し、生き抜くための知恵として、島嶼を貫く伝統的な環境対応が作用した結果として、独自の生存文化が形成されたと仮説することができるのではないか。これは、南西諸島の一連の研究で見出した仮説とおおむね一致しており、今後の研究における共通テーマとして位置付けることができるかもしれない。

このような研究テーマで具体的に国際共同研究を進めていく予定である。すでにアテネ国立工科大学建築学部との共同研究のための体制を構築できたことに加えて、持続可能なキクラデス諸島のためのネットワーク組織との連携が確立できたことで、我々が行ってきた南西諸島研究との比較を行いながら研究を進めていきたい。

## 謝辞

本在外研修は、2023年度在外研修として、武庫川女子大学より給費を受けて実現し、1年間のきわめて有意義な研究調査滞在を経験することができた。人事課をはじめとする学内の関係者の皆様に、とりわけ暖かい応援をいただいた学科の皆様に、記して感謝したい。また、ギリシャでの研究を受け入れていただいた、アテネ国立工科大学建築学部とNicholas先生には心から感謝したい。

そして、私を受け入れてくれた島民の皆さんに、深く感謝したい。